

第2章 「革命を成功させる秘訣 Arcana Revolutionis」

保守派にとって「革命を成功させる秘訣」など恐怖の的のはずだが、いまや革命は憧れの的となり、**「名士 highly respectable people」**ですら革命を成功させることを夢見て「秘訣」を学んでいる。

フランス革命のあと各国の保守派は王政復興の必要性を確信するようになり、ジャコバン派との戦いを開始した。アメリカの政治家であったモリス **Gouverneur Morris** (1) ですら 1815 年に王政復興が実現したことを喜んでいて、つぎのように言ったそうである。「アメリカ人よ、喜べ。ブルボン王朝が復活した」。いま多くの国で「自国民中心主義者 **nationalist**」は、「白色革命 **revolution against the Hydra of Marxism**」を準備している。左派による革命であれ右派による革命であれ、革命には残虐行為が付きものだが、銀行家も学者も聖職者も「白色革命」を待ち望んでいる。

平和が 30-50 年と続き、秩序が維持されていたところで革命が起こることなど、誰も考えなかった。誰もが、そのことを忘れてしまった様である。いまそんなことを口にすれば、時代遅れの人間ということになる。保守派ですら革命を望み、反動よばわりされることを嫌う現在である。過激派だけが革命を望んでいる訳ではない。保守派までが革命を待ち望むようになったのである。「法と秩序 **Law**」・「正統性 **Legitimacy**」・「忠誠心 **Loyalty**」などといった言葉が人の心を熱くすることは無くなり、労働者や「貴族 **gentlemen**」のみならず、法律家・将軍・提督のような人たちまでが革命を考えるようになった。

第一次世界大戦まで対外戦争とは、国にとって「はしか」みたいなものであった。「名士」ですらやむを得ないものと考えていた。しかし第一次世界大戦のあと対外戦争は、どの国にとっても「やむを得ないもの」ではなくなった。戦争は政策遂行の手段でなくなったのである。そもそも戦争を起こすことが不可能になった。戦争を起こすことは「神々の黄昏 **Twilight of Gods**」(ヨーロッパ各国の衰退)を意味するどころか、「ヨーロッパの終焉 **finis Europae**」を意味するようになった。経済活動の規模がグローバルになったことから、大陸国家でもないかぎり、1 国だけで経済・軍事の問題を処理することは不可能になった。ヨーロッパでは、1 国だけで戦争を遂行することは不可能になってしまった。第一次世界大戦でそのことが明白になった以上、ヨーロッパの国が戦争を始めることはないであろう。ヨーロッパでは、1 国が戦争を起こせる時代は終わったのである。航空機で 1 時間に 300 マイルも移動できるようになった時代に、国境から国境まで 1000 マイルも無いような国が戦争を起こす時代は終わったのである。

もちろん、こうした現実はまだ十分に認識されていない。政治家についても同様で、そのことを十分に認識しているとは言えないが、さすがに彼らは現実的である。

彼らが戦争の可能性を口にする場合、大陸規模で複数の国と軍事同盟を締結することを前提にしている。戦争が政策遂行の手段である時代は終わったことを、政治家はよく知っているのである(少なくともヨーロッパでは)。

ふたたび 1 国だけで戦争を起こすことが可能になる時代がやって来るかもしれないと言う読者がいるかもしれないが、その可能性は無視してよい。なぜなら、第一次世界大戦後のヨーロッパでは内戦の可能性が高まっており、国家間で戦争が起こる可能性は少なくなったからである。政治家は対外戦争を煽ることを止めて、内戦を煽るようになった。

内戦が国民の支持を得るようになってきているが、こんなことは歴史上、初めてのことである。イタリアの黒シャツ隊、ソ連(ロシア)のコムソモール(共産主義青年同盟)、ドイツの突撃隊は国内の敵を攻撃することに専念しており、そのことで英雄視されている。

アイスキュロス **Aeschylus** の時代のギリシャでは、内戦のことを「鶏闘 **cock-fight**」と呼んでいた。

鶏がペルシャ伝来の珍しい鳥であったため、そんな名前と呼ばれたのである。それほど当時のギリシャでは、内戦は珍しい出来事であった。

内戦は、もっとも忌むべき戦いと考えられてきた。内戦は「騎士道の精神 **code d'honneur**」と無縁で、親類縁者・友人・仲間が敵味方に分かれて殺しあう戦いであった。インデアン・黒人・フン族・異教徒を相手の戦いなら、なぜ戦うのかその理由が理解できた。遠く離れて住んでいた彼らは、自分たちと無縁な人間だと思われたからである。しかし対外戦争の時代は、いまや終焉を迎えようとしている。

ジェファソン **Thomas Jefferson** は 20 年間隔で「ちょっとした革命 **a nice little revolution**」を起こすことを提案していたが（革命によって変革を継続させることができる）、彼には新しい時代の到来が判っていたのである。その頃から、全てがグローバルに展開されるようになっていた。国単位でなく、地球単位で物事を考えることが必要になって来たのである。遠く離れて住んでいるか否かは、もはや問題でなくなった。

1914 年に駐仏ドイツ大使のシェーン男爵 **Baron von Shoen** が対仏宣戦布告をフランス政府に告げに来たとき口にしたとされる言葉「開戦はヨーロッパにとって自殺行為を意味する **C'est le suicide d'Europe**」や、モロッコで開戦の報を聞いたフランスのリョテ元帥 **Hubert Lyautey** が口にした言葉「ヨーロッパで戦争が始まったって？それは戦争でなく内戦だ」は象徴的である。

第一次世界大戦の結果、内戦の時代が始まったのである。平和運動も、この現実に対応する必要がある。旧来型の平和運動が可能なのは、戦争遂行能力を持つアメリカだけになってしまった。ヨーロッパで戦いを望む者は、内戦しか起こせなくなったことをよく知っている。そこで彼らは革命を望むようになった。第一次世界大戦前に社会主義者（フランスのブリアン **Aristide Briand**、イギリスのマクドナルド **Ramsay MacDonald**、ドイツのバウアー **Otto Bauer**）が革命に失敗したのは、内戦を避けようとしたからであった。

ヨーロッパの社会主義者は対外戦争に反対だっただけでなく、内戦も避けようとしていた。ドイツ社会民主党の党首エーベルト **Friedrich Ebert** は「革命を嫌うことペストのごとし」と言われていたが、彼が嫌っていたのは内戦であった。そこで社会主義を信奉する労働者に代わって、前線から帰ってきた兵士が内戦を起こすことになった。

彼らは塹壕のなかで戦争の恐ろしさを思い知らされていた。敵側の塹壕にいる兵士も自分たちと同じ兵士であり、同じ戦争の犠牲者であることを彼らはよく知っていた。1914-18 年に塹壕で経験したことから、彼らは「万国の兵士たち！回れ右して（祖国に帰り）団結せよ！」と唱えるようになった。

彼らには「万国の労働者、団結せよ！」より、こちらの方が本物だと実感できたのである。予想もしていなかった戦場の残酷さを経験させられ、なすべきことが彼らには判っていた。

マルクスは「階級意識 **class-consciousness**」という言葉で労働者に団結を呼びかけたが、その意味を本当に理解したのは兵士たちであった。ドイツでナチ党（国家社会主義党）は元兵士を動員しようとしたが、まさか元兵士が「新しいタイプのプロレタリアート **proletarian in a new aggregate form**」であるとは考えていなかった。ナチ党に言わせれば、農民・労働者・職人は「おなじ仲間 **thoroughly brotherly lot**」であって、敗戦の責任者ユダヤ人が敵であった。「国と国 **nations**」が敵対することは無くなったのである。

ナチ党のやり方はマルクス主義者のやり方の焼き直しであった。マルクス主義者にとって敵であったのは王侯貴族や資本家であった。それがジャーナリストとユダヤ人に代わっただけである。マルクス主義者もナチ党も、ヨーロッパで戦争の時代が終わったことをよく知っていた。彼らは戦場から持ち帰った武器でお互いを攻撃し合っていたが、戦争の時代が終わったことはよく知っていた。レーニン **Vladimir**

Leninは戦争をしてまでロシア領を守るつもりはなかったし、ヒトラーAdolf Hitlerも戦争でドイツ人の血を流すのは嫌っていた。流すのは国内のユダヤ人の血であった。フランス紙とのインタビューで、「戦争をすればドイツのエリートが死んでしまう。だから戦争をすることなど有り得ない」と答えていた。

レーニンもヒトラーも、農民や労働者が対外戦争に興味がないことをよく知っていた。しかし、手元にある武器は使いたかった。それを国内で使うことにしたのである。ムッソリーニ Benito Mussolini も同じであった。ソ連（ウクライナ）のドネツク炭鉱が国有化されたときと同様、イタリアでもアグロ=ポンティーノ Agro Pontino 湿地帯の干拓事業や通貨リラを強くする政策によって、穀物・資金・原料・家屋・土地が没収された。それは内戦の一種であった。ムッソリーニ宛であれスターリン宛であれ、電報はまるで前線から送られてきた戦況報告のように読み上げられ、戦時の経営者に認められたような権限が「非常事態 emergency」を理由に経営者に認められた。「非常事態」が対外戦争に取って代わることになったのである。リンカーン Abraham Lincoln の奴隷解放令やローズベルト F. D. Roosevelt のニューディール政策も同じであった。「非常事態」が対外戦争と同じ意味を持ったのは、他の国でも同じであった。領土をめぐる外国との戦いが、自然相手の戦いを取って代わられたのである。6000年も続いた対外戦争の時代が終わり、新しい戦いの時代が始まったのだが、そのことに誰も気づいていなかった。革命が対外戦争に取って代わることになったのである。

こうして、戦争といえば内戦を意味するようになった。革命によって内戦が開始されると、国は敵対する2つの集団に二分され、その関係はまるで敵国どうしのものであった。共通の言葉や共通の伝統が失われ、だれもが自信喪失の状態に陥^{おちい}っていた。昔からの伝統、受けてきた教育、築き上げた富に対する誇りが失われてしまい、だれもが株価の変動と新聞の報道に振り回されるようになった。現代人の健忘症には驚かされるばかりである。自分の信念・伝統・教育のすべてを忘れ去ってしまったようである。

平和で安全だった日常が、突如として内戦と「非常事態」に取って代われ、「ながい顎鬚の大佐 long-bearded colonels」や「若者 gilded youth」は狂喜^{きょうき}することになった。国家どうしの戦争の時代が終わり、国内で階級と階級が争う「階級戦争 class-war」の時代が始まったのである。「知識層 literati」までが冷静さを失い、極左や極右を支持するようになった。

革命が好きな時に起こせるようになり、我々の未来は革命をどこまでコントロールできるかで決まってくるようになった。多くの革命が起きて「革命学 a science of revolutions」の構想すら可能になるほどであった。この革命の時代を生き延びるためには、かつて我々の祖先が持っていた原始的な本能を取り戻す必要があるようである。

カッサンドラのように（トロイの女王カッサンドラはトロイの滅亡を予言したが、だれもその予言に耳を貸そうとしなかった）未来に起きる不幸を嘆^{なげ}くことしかできない者に、革命を論じる資格はない。未来に起きるはずの大惨事に、冷静に対処できる者だけが革命を論じることができる。第一次世界大戦と2つの革命（ロシア革命と戦後ドイツの混乱）を経験した我々には、革命が言われているほど素晴らしいものとは思えない。

愛する者を失ったからといって、我々は生きるのを止めるわけにはいかない。生きるということは、涙と喜び、絶望と希望をともに味わうことを意味する。革命さえ成功すれば全てがよくなると思えるのは、単純に過ぎ^すぎる。街頭で誰かが射殺されるのを見れば、誰でもショックを受ける。人類の歴史を「自分自身の歴史」と感じる者なら、新しい時代のためだからといって簡単に人殺しができる訳がない。葬式で遺族とともに涙を流しても、洗礼式に出席すれば笑顔が戻ってくる。また船の遭難^{わげ}に際して涙を流しても、船の進水式では笑顔が戻ってくる。いま、あらゆるところで変化が求められている。しかし、その変化は「誇れる形の変化 change with honor」でなければならない。過去を辱^{はずかし}めるようなことがあ

ってはないし、未来を崇め奉るようなことがあってもならない。

「誇れる形で変わることに **to change with honor**」は難しい。ふつう人は風見鶏のように、風向きに合わせて「信念 **creed**」を変えてしまうものである。誇りなど無きに等しいやり方で、簡単に「信念」を変えてしまうものである。

革命の時代、ものごとを自分の意志どおりに変えることは難しい。「信念」を毎日くるくる変えるのが当たり前になっている現在、人間にできることは限られてくる。危険なのは、すべての変化を惰性で受け入れてしまうことである。十分に考え、心から納得して変えるには、ながい時間が必要とされる。

「誇れる形で変わる」には、相反することを同時に実現しなければならない。あまりにも誇りを重視すると、変化を受け入れることができなくなる。また変化を機械的に受け入れるだけでは、「人間が秘めている可能性 **potentialities of the soul**」を十分に発揮することはできない。

革命は「大きな飛躍 **great forward leaps**」を意味する。「ものごとは飛躍する **Natura facit saltus**」のである。しかし人間が死に絶えることはないし、国が滅び去ることもない。人間には「不思議な力 **the finest forces of the soul**」が備わっているからである。兵士・革命家・企業戦士も立派だが、みずからの家庭を築くために父母のもとを去っていく花嫁も立派である。花嫁の姿こそが「誇れる形の変化」である。花嫁は両親の元を去って新たに自らの家庭を築き、子供を育てることになる。彼女は放棄すると同時に獲得するのである。

人間が活動を止めることはない。革命がどんなものになるかは、人間の活動しだいである。いま革命の時代が始まろうとしているが、革命の破壊力を我々はうまく利用する必要がある。水と火をうまく利用してきたように、革命の破壊力をうまくコントロールする必要がある。それに成功するか否かで我々の未来は決まってくる。

これまで、革命は静寂と平和を壊すだけだと考えられてきた。これからは、革命を使って新しい社会を築くことになる（このことを証明するのが、この本のテーマであった）。トンネルや道路をダイナマイトで建設するように、革命を使って新しい社会を建設するのである。

ジェファソンの夢は、革命という「無法 **lawlessness**」によって社会を作り変えることであった。我々に残された道は、それしかない。ただ、「無法」と「合法 **law**」のバランスを取るのがむずかしい。水と火は、おたがいに相容れない存在である。それでも人間は、水と火をうまくコントロールして利用してきた。「王に忠実な革命家 **loyalist revolutionary**」とは語義矛盾である。しかし人間には、この語義矛盾を解決する能力がある。人間のなかには王党派的な要素と革命家的な要素が共存しており、黒か白かのように二者択一の関係にはない。王党派的な要素が 80%、革命家的な要素が 20% という場合もあれば、王党派的な要素が 51%、革命家的な要素が 49% という場合もある。ラテン語の諺「人間に関係のあることで私にとって無関係なことはない **nil humani a me alienum**」(2) は、我々の諺でもある。人間には「革命によって壊したいという気持ち **heart**」と、「大人しく従いたいという気持ち **soul**」が共存しているのである。我々の心のなかには、戦争と平和が共存しているのである。

かつて祖国のために戦うことは名誉あることとされ、さらに本人が平和を愛する人間なら、いっそう名誉あることと賞賛された。しかし内戦しか存在しない時代になって、かつての兵士は平和を愛する国民ではいられなくなった。語義矛盾ではあるが、「国王に忠実な革命家」にしかねなくなったのである。秩序と秩序破壊を同時に好む者、遵法精神と無法精神が共存する人間にしかねなくなったのである。

語義矛盾を解決することは簡単でないが、その方法を探る必要がある。この本で私がやろうとしていることも、それである。地球が狭くなって、言葉が光のように高速で地球を駆け巡り、人間が飛行機で

高速移動できるようになった現在、革命が持つ意味は一層、大きくなった。

対外戦争が内戦に変わった以上、将来の革命は国民の連帯に依存せざるを得ない。異教徒・異端者・フン族を相手に戦っていたときは、相手を人間以下だと軽蔑していれば済んだが、いまではそれも不可能である。すべての人間は平等だとされており、しかも内戦は同じ国民どうしの戦いである。それが判ただけでも、第一次世界大戦の時よりは「立派^{りっぱ}spiritualization」である。

世界的な連帯の必要性が認識されるには、ながい時間が必要であった。世界は1つという考え方は古くからあった。「保守的な革命家」ないしは「革命的な保守派」になった元兵士諸君に、ぜひこの本を読んでもらいたい。かつて革命がどうであったかが判るはずである。国のために戦っていた兵士も、じつは国のためだけでなく人類のためにも戦っていたのである。これは古くからあったパラドックスであった。このパラドックスこそが人間社会のあり方を変えて来たのである。

とくに指摘して置きたいことは、革命が生み出したものが簡単に無くならないということである。この本で説明する革命では、さまざまなタイプの人間や制度が生まれて来たが、それが未来に起きる革命でも無くなることはないであろう。

多くの犠牲を払って革命が生み出したものは「革命耐性 revolution-proof」を持っている。なぜそうなのかを理解しないかぎり、我々に未来はない。